

たてはく



館長
岡田 知己

新春万福

昨年、5年ぶりに布橋灌頂会復元イベントが開催されました。本来であれば令和2年9月の開催予定でしたが、コロナ禍のため2年延期されてきました。今回は無観客のイベントになりましたが、5年ぶりの布橋灌頂会を祝福するかのように当日は日本晴れの天気のもと、感動的な素晴らしいイベントになりました。実行委員会からは、今年も実施する予定とのこと。今から大変楽しみです。

さて、いま「日本三霊山」に注目が集まっています。三霊山とは、一般的に立山・富士山・白山を指します。江戸時代、民衆の自立とともに、神仏との邂逅を求めた寺社参詣が大変盛んになり、いわゆる「巡礼」が積極的に行われました。なかでも立山、富士山、白山を登拝・巡礼することは「三禅定」と呼ばれ、多くの巡礼の中でも特に過酷で苦行だったようです。

人々はなぜそのような過酷な旅にあえて挑戦したのか。立山博物館では、平成22年に特別企画展《立山・富士山・白山 みのつ山めぐり一霊山巡礼の旅「三禅定」一》を開催しました。「三禅定」とは何かという課題に

対し、当館のこれまでの研究成果をわかりやすく紹介した大変意義のある企画展でした。

とはいえ、「三禅定」がなぜ立山・富士山・白山なのか、三山の共通性、枠組みの形成と宗教性など、今後の課題とすべきことも多く見つかりました。三霊山が注目されている今こそ、残された課題に取り組む絶好の機会にしたいものです。

立山博物館は、自然と人間とのかかわり方をテーマに、開館以来30余年にわたって調査研究を進めてきました。言い換えれば、30年以上前から「SDGs（持続可能な開発目標）」の実現を目指す取り組みを続けてきたとも言えます。立山の雄大な自然と、そこに住む私たち人間とのかかわり方を学ぶことで、ふるさとの歴史や文化についての理解を深め、誇りや愛着を育んでくれること、これこそが立山博物館の使命だと考えます。

今年は開館から32年目を迎えます。令和5年、癸卯、西暦2023年。野山を飛び跳ねる兔のように、更なる飛躍の年となることを願ってやみません。本年も立山博物館をよろしくお祈りします。

目次

新春万福	1
令和4年度・後期特別企画展	
「立山のお地蔵さま 一苦しみに寄りそう一」を終えて	2
現代的イベント「布橋灌頂会」と「布橋灌頂会開催記念公開展」を開催！	2
学芸課発 立博雑学	
第7回 矢場延命地蔵尊の安置場所について	3
令和5年度 冬の立山曼荼羅特別公開展 描きかえられた!?立山曼荼羅	3
令和4年度 文化講演会「地蔵霊場としての立山」を終えて	4
友の会バスツアー 「今年度は福井県嶺北地方で学ぶ！」	4
立博ぶらり探訪・もみじを愛でる会を終えて	4
編集後記	4





令和4年度後期特別企画展

「立山のお地藏さま ー苦しみに寄りそうー」を終えて

本展では、立山の地藏霊場としての一面に着目し、時代を越えて人々の苦しみに寄りそう地藏菩薩の姿かたちを、説話や絵画、仏像から幅広く紹介しました。

第1章「地獄とお地藏さま」では、「地獄の救済者」としての地藏菩薩に焦点を当て、日本における地藏信仰の変遷を概観しました。第2章「立山のお地藏さま」では、立山地獄を舞台に女性の亡者の身代わりとなって炎に包まれる地藏菩薩を描く『地藏菩薩靈驗記絵巻』（米国・フリーア美術館蔵）を起点に、山中の地獄谷や賽の河原、山麓の芦峯寺に祀られる地藏菩薩像、立山曼荼羅などを紹介しました。また、かつて芦峯寺閻魔堂の前庭に鎮座した銅造地藏菩薩半跏坐像（小矢部市・観音寺蔵）のほぼ原寸大のパネルを設置し、撮影スポットにしました。第3章「立山ゆかりのお地藏さま」では、立山地獄谷ゆかりの地藏菩薩像が、名古屋・金沢の寺院から初出展され、数百年を経ての里帰りが話題となりました。また、展示室中央に石倉町延命地藏尊の地藏盆をイメージ展示し、現代に息づく地藏信仰の一端を紹介しました。

関連イベントとして、展示解説会と文化講演会のほか、尾田武雄氏（日本石仏協会理事）による「芦峯寺のお地藏さまめぐり」を開催し、約40名が参加されました。

本展開催にあたりご協力いただきました関係の皆様方に、改めて感謝申し上げます。（観覧者数2,194人）（石崎康弘）



金沢・名古屋に伝わる立山・地獄谷ゆかりの地藏菩薩像



展示解説会のようす



現代的イベント「布橋灌頂会」と「布橋灌頂会開催記念公開展」を開催！



江戸時代には、死後、立山山中の「血の池地獄」に堕ちると信じられていた女性たちを救うべく、芦峯寺集落で閻魔堂・布橋・嬬堂を舞台として「布橋灌頂会」が行われていました。この儀式を再現した現代的イベントが、2年の延期を経て、昨年9月25日（日）、5年ぶりに開催されました。

芦峯寺の人びとの間では「布橋灌頂会イベントの日には雨が降らない」という噂があるのですが、まさに今回は「晴天」！！雲もなく立山がはっきりと見えたので、参加された女人衆の皆さまの感激も一入だったように思えました。

そしてこのイベント開催にあたり、立山博物館でも、布橋灌頂会開催記念公開展「布橋を渡る一女性たちの救いと祈り」と題して、布橋灌頂会を史料から紹介するミニ展覧会も開催しました。3回実施した展示解説会にも沢山の皆様にご参加いただきました。

昨年のイベントは「無観客」で、女人衆も「富山県内の女性」と限定した上で30名募集しましたが、今年は本来の開催年！布橋灌頂会実行委員会からは「多くの皆様にご参加できるように準備したい」と聞いていますので、今から楽しみです。

もちろん立山博物館でも、今年も布橋灌頂会を紹介していきたいと思っておりますので、こちらも楽しみにしててください。（細木ひとみ）



布橋灌頂会イベントのようす（令和4年9月25日撮影）



布橋灌頂会開催記念公開展





学芸課 発

立博雑学



学芸課によるリレー形式のコラムです。立山や立博についての蘊蓄や魅力を、雑学としてお伝えします。

第7回 矢場延命地藏尊の安置場所について

昨秋の後期特別企画展「立山のお地藏さま」で名古屋市・清浄寺の「矢場延命地藏尊」【写真】が話題となった。本像は同寺の本尊で、毎年8月24日の地藏盆のときにだけ開帳される秘仏である。本像の縁起はいくつか確認されているが、そのうち3点の縁起にあたった時点で、像の安置場所についての記載が、縁起ごとに異なることに気づいた。企画展では構成上触れられなかったため、本稿で紹介したい。

まずは、一般に普及している同寺の縁起として、昭和32年(1957)以降に発行された小冊子『矢場地蔵清浄寺縁起』所載の「矢場地蔵尊御縁起」⁽¹⁾を確認したい。要約すると、念仏行者の善入が、立山山麓の宿で見た霊夢に導かれ地獄谷に赴くと、煙の中から光り輝く地藏菩薩像が現れた。その像を持ち帰り、初め尾張国愛知郡尾頭村に庵を結んで安置する。参詣者が増えたことで尾張藩主の耳に入り、一時は名古屋城に安置されたが、元禄14年(1701)に徳川家の祈願寺であった清浄寺に遷座された、というものである。これには、善入が立山地獄谷から本像を持ち帰り、初めに尾張国愛知郡尾頭村(現在の名古屋市熱田区尾頭町辺りか)に安置したとある。

実は、本展にかかる調査で、同寺に存在を知られていない縁起が、名古屋市蓬左文庫で見つかった。これは、昭和11年(1936)の『矢場地蔵清浄寺縁起』所載の「矢場地蔵尊縁起」⁽²⁾とあるもので、前掲の縁起を書いた住職の前代が記している。これには、善入が本像を持ち帰り、濃州可見郡御嵩村(現在の岐阜県可見郡御嵩町)及び海東郡津島村(現在の愛知県津島市)等で庶人と結縁したのちに、尾張国愛知郡尾頭村に安置したとされている。

また、江戸期に刷られたとみられる木版資料「尾府矢場地蔵尊縁起」も確認されており⁽³⁾、これには、

初め本像を安置したのが、2つめの縁起では結縁の地の一つとされた、濃州可見郡御嵩村となっている。

いずれにしても、立山地獄谷から持ち帰られた本像が、尾張や美濃という立山衆徒の檀那場が広がる地域に安置されたというのは興味深い。なお筆者は未見だが、上記3点の縁起とは別に、明治十年代後半頃の発行と思われる木版資料「矢場地蔵菩薩縁起」の存在も確認されている⁽⁴⁾。

本像については、縁起以外に立山との関係を示す史資料がなく、厨子から取り出せないという構造上の制限もあることから、製作年代や材質について見解が分かれるなど、詳しいことがほとんど分かっていない。今後は未見の「矢場地蔵菩薩縁起」をはじめとした縁起類と、尾張や美濃の檀那場についての調査を進め、立山と矢場延命地藏尊との関係や、立山の地藏信仰の実態により迫り、東海地方への立山信仰の広がりを考える手がかりとしたい。(石崎康弘)

(1)昭和32年の現本堂完成以降に、清浄寺15世・飯田円明が記したもの。

(2)清浄寺第14世・沙門法譽が記したもの。

(3)川口高風「名古屋の寺院に関する木版資料について(十三)」(『愛知学院大学教養部紀要』62-3、2015年)

(4)川口高風「名古屋の寺院に関する木版資料について」(『愛知学院大学教養部紀要』51-1、2003年)。また、同展図録所収の渡浩一「説話にみる立山のお地藏さま」では、本縁起と「尾府矢場地蔵尊縁起」では、最初の安置場所が異なることを指摘している。



【写真】矢場延命地藏尊

冬の立山曼荼羅 特別公開展

描きかえられた!? 立山曼荼羅

令和4年12月13日(火)~令和5年2月26日(日)

現在確認されている「立山曼荼羅」52点から、テーマを設けて紹介している特別公開展。今年度の冬は絵の一部が描きかえられている「立山曼荼羅」に注目しています!

「立山曼荼羅」には一部の絵が描きかえられているものがあります。その中から、本展示では坪井家A本(個人蔵)と立山黒部貫光株式会社本(立山黒部貫光株式会社蔵)を紹介しています。

例えば、坪井家A本の「布橋灌頂会」の場面(右画像)をみると、閻魔堂の位置が描き替えられています。これは、「当初、布橋灌頂会と閻魔堂が切り離されていたのに、後から儀式を行う舞台の一つとして閻魔堂が取り入れたから」と考えられます。

ぜひ、2つの立山曼荼羅のどこが描きかえられているのかを探してみてください。(細木ひとみ)



会場：展示館2階 常設展示室(一部)

開館時間：9:30~17:00(入館は16:30まで)

観覧料：常設展示観覧料 一般300円(団体240円)※大学生以下と70歳以上は無料

会期中の休館日：月曜日(ただし1/9は開館)、12/29(木)~1/3(火)、1/10(火)、2/15(水)、2/24(金)





令和4年度文化講演会 「地蔵霊場としての立山」を終えて

10月15日（土）に、地蔵説話研究の第一人者である渡浩一氏（明治大学国際日本学部教授）をお迎えし、これまで語られることの少なかった、「地蔵霊場としての立山」にスポットを当てた講演会を開催しました。（参加者56名）。渡氏は、『今昔物語集』をはじめ、立山地獄を舞台とした「地獄の救済者」としての地蔵菩薩が登場する様々な説話を例に挙げ、立山が古くは地蔵霊場としても人々に広く知られていたことをお話されました。参加者からは「立山にこんなにも多くのお地蔵さまのお話があったのか！」との驚きの声が寄せられ、立山を地蔵霊場という、新たな視点で捉え直すきっかけとなりました。（石崎康弘）



友の会バスツアー 今年度は福井県嶺北地方で学ぶ!

11月16日（水）、立山博物館友の会の見角会長をはじめ、友の会会員、ボランティア会員の総勢38名でバスツアーに行ってきました。初めは行き先がなかなか決まりませんでした。福井県の嶺北地域を中心にかなり盛りだくさんのバスツアーに!

午前中は、白山開山の祖とされる泰澄大師が誕生したと伝わる白鳳山泰澄寺（福井市）と遷化された地という越知山大谷寺（越前町）へ。午後は、昨年10月1日に開館した福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館（福井市）へ訪れ、最後に大本山永平寺（永平寺町）の承陽殿近くの傾斜地に安置されている「銅造地蔵菩薩半跏坐像」を特別に拝観させていただきました。この地蔵菩薩像は、芦峯寺教蔵坊が願主となり、長野県の松本の人々が寄進した仏像で、明治期の神仏分離の影響で永平寺に遷されたと伝わっています。後期特別企画展で紹介したこともあり、参加者の「近くで拝みたかった!」という声が多く寄せられたお地蔵さまです。

前回同様、天気にも恵まれず、行程もハードなツアーになってしまいましたが、泰澄大師の足跡を巡りつつ学び、新たに誕生した博物館の熱気に「立山博物館も負けてられないぞ!」とみんなが感じたツアーになったように思います。（細木ひとみ）



越智山・大谷寺にて

立博ぶらり探訪・もみじを愛でる会を終えて

7月23日（土）、10月8日（土）の両日「立博ぶらり探訪」を、また11月3日（木・祝）6日（日）の両日「もみじを愛でる会」を教算坊にて開催しました。両企画とも学芸員による立山曼荼羅の絵解き解説を実施し、ぶらり探訪では企画展鑑賞や芦峯寺周辺を散策、もみじを愛でる会では鉄道模型の展示と昭和40年代の立山観光に関する懐かしい映像上映をしました。

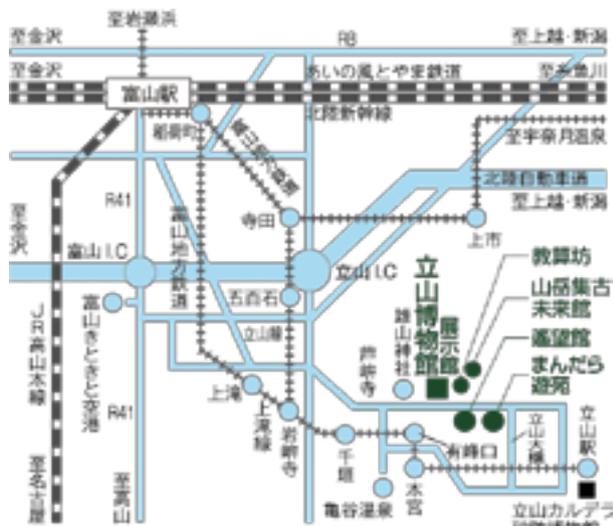
今も受け継がれる立山信仰と芦峯寺の文化遺産を、これからも大切にしていきたいと思います。（毛利成宏）



編集後記

三禅定に布橋灌頂会に、と立山に注目が集まる好機がめぐってきています。立山博物館も、地域や他施設とも協力しながら、立山を盛り上げていく所存です。ときに、「SDGs」ではないですが、当館も「持続可能な」博物館として発展を続けるため、時代の趨勢を探りつつ、新しい挑戦を続けています。やはり何を始めるにも温故知新が大切で、伝統と革新のバランスが肝要だと実感するこの頃です。（坂口）

案内図



- 最寄り駅
富山地方鉄道立山線千垣駅
下車徒歩(約2km)
※日曜を除き町営バス運行
「雄山神社前」下車すぐ
- 自家用車で
JR富山駅から 約45分
立山駅(千寿ヶ原)から 約15分
富山インターチェンジから 約35分
立山インターチェンジから 約30分

立山博物館のホームページはこちらから。



人間と自然のかかわり方を学ぶ

富山県[立山博物館]

〒930-1406 富山県中新川郡立山町芦峯寺93-1
TEL 076-481-1216 FAX 076-481-1144

<https://www.pref.toyama.jp/1739/miryokukankou/bunka/bunkazai/home/index.html>

FacebookとTwitterあります!

立山博物館